

書 評

エレノア・G・ギルパトリック『構造的失業と総需要；
1948～1964年合衆国における雇用と失業の研究』

Elenor G. Gilpatrick, *Structural Unemployment and Aggregate Demand;
A Study of Employment and Unemployment in the United States,
1948-1964*, The Johns Hopkins Press, 1966, xviii + 235 pp.

生産高あるいは所得において順調な発展をしているアメリカ経済が、持続的に高失業率に悩まされていることはひとつの謎である。1954年から1966年にいたる間、アメリカの失業率が4%を下ることはなかった。4%の失業率は、イギリスをはじめ自由経済圏諸国の失業率に比べて異常に高いものであり、アメリカ経済にとって明らかに危険信号を意味した。

経済が成長するにもかかわらず、なぜ失業率が低下しないのか。この問題は、当然、経済学者および政策担当者の関心を呼びおこし、さまざまな見解が披歴された。そのなかで大勢を占めたのは、失業の原因を有効需要の不足にもとめる見解であった。これら需要論者は、その対策として有効需要の増大を提案し、きわめて頑固な失業すらこの方策によって解消されるであろうと主張した。しかし、他方に少数派ではあるが、経済の構造変化が繁栄の中での大量失業の原因であると考える一派があった。彼らにとっては、就業機会の一般的不足が問題なのではなく、経済における構造的障害が失業者の就業を妨げていることが問題なのであった。

本書の著者ギルパトリックは、このアメリカ経済にとって重要な問題、それをめぐって鋭い意見の対立がみられる問題を、資料のゆるすかぎり注意深く事実を照して検討し、真相がどこにあるかを明らかにしようとした。著者が得た結論は、失業率の持続は有効需要の不足と構造的変化の結合の結果であったというにある。これは一見安易な折衷論のように見えるが、決してそうではない。著者がアメリカの失業の原因が需要不足と構造変化の結合の結果であるというとき、単なる折衷より深い関係が意味されているのである。

著者によれば、需要派の最大の欠点は労働力の同質性を暗黙に前提している点にあるのであって、事実的確な把握のための出発点は、労働力の異質性の承認とそれを把握するに必要な概念構成にある。労働力に要求される技能の補完性 complementarity、代替性 substitutability および移転性 transferability という三つの概念が準備される。これからも察せられるように、著者の主力は構造的失業の解明にむけられており、その点に本書の魅力とメリットがあるといえる。

しかし、失業の需要的側面が無視されているわけではなく、有効需要の増強は完全雇用の実現にとって必要条件であることはみとめられている。しかし、それが同時に十分条件であることは否定されている。有効需要刺激政策は、現在のアメリカ経済において、労働市場の流動性を高め、構造的失業の解消に資する政策と両々あいまってはじめて有効な雇用政策となりうる。これが著者が本書の分析を通して到達した政策的結論である。

本書を通読してたえず念頭を去らなかつたのは、わが国の労働市場の現状と将来の動向である。わが国においても高度成長の推進はたしかに労働市場の改善に貢献した。この事実は成長政策の持続こそが二重構造解消の道であると信じる成長論者にとって有力な支柱となるであろう。しかし、高度成長はいま経済の諸方面にさまざまな問題を提起している。それらの問題の多くは、“構造的”とよばれるべき問題である。労働市場の問題もいまや一般的な過剰から不足への転換としてとらえうる段階はすぎて、一方における過剰と他方における不足が共存するところの労働市場の異質性を前提としなければならない段階にきている。その意味において、本書のとり上げている問題は、われわれにとってもきわめて身近な問題であるといわなければならない。

(岡崎 陽一)